

横手の送り盆まつり

横手の送り盆まつりは、300年以上前から8月15日と16日に行われている、故人を偲び、故人と交わるためのお祭りである。祭りに先立って行われる「ねむり流し」では、地元の子供たちがロウソクで飾られたワラ舟を横手川に運び、川原では太鼓を打ち鳴らし、灯籠を流す。この行事は、夏の暑さで眠くなると悪霊に襲われるので、その眠気（ねむり）を払うために行われた「流し」が起源とされている。8月15日には町民が集まって盆踊りを行い、16日には重さ800kgもある大きな萱引きの屋形船を川に流して死者の霊を弔う「屋形船送り」が行われる。

お盆の歴史

日本全国で行われている夏の祭典「お盆」は、仏教の法要が起源とされている。横手の送り盆まつりは、江戸時代（1603-1867）に横手の柳町の住民が主催した追悼行事が始まりである。この時代、日本は3度の飢饉に見舞われ、食糧不足、米価の高騰、そして何千人もの人々が命を落とした。柳町の人々は、この飢饉で失われた多くの人々を偲び、横手川に藁舟を浮かべた。その後、柳町以外の地域でも船が作られるようになり、現在では屋形船の「繰り出し」という形で受け継がれている。この屋形船は、「ねむり流し」の際に子供用の小舟と同じ場所に並べられ、僧侶による「御霊送り」が行われる。今では船を川に流すことはないが、「ねむり流し」で放たれる小提灯の灯りは、江戸時代の風習を彷彿させる。

舟こぎの儀式（ぶっつけあい）

祭りに参加する屋形船は、横手の各地区の住民や商店主が準備する。舟の骨組みは前回の祭りで使ったものを再利用するが、船体や金具は毎年新たに作る必要があり、その作業には1カ月ほどかかる。参加町内がそれぞれ屋形船を作り、その屋形船を町内から横手川の河川敷まで運ばなければならない。8月15日の盆踊りでは、観光客が間近で見られるように船が並べられる。16日には舟を川に下ろして「送り火」を行う。続いて、送り盆まつりのハイライトである「屋形船のぶっつけあい」が行われる。舟は橋の上に戻り、2隻ずつ向き合い、舟のへ先を持ち上げぶっつけあいを繰り広げる。各地区の代表者が船に乗り込み、声を張り上げて手を振り、頭上では花火が打ち上げられる。